志[illegible]里　四十四

内閣文庫

和書	類	號	冊	架
		二八四二〇	一〇〇	二一一函三〇〇

(四四冊)

内閣文庫		
番號	和	28420
冊數	100	(44)
函號	211	300

明治十二年購求

志保芝黎巻之四十四

正徳

左義長
四生の別
浮塵子
方目　告天子
枕草紙の歌
宝永七歳疾疫牧々頌并文
公通書播抄
奥州の象潟
獅子の胡語
杜詩ハ違此去

女児生して蕪ハ皮屏婦を治ス
鳥山氏女の子あり事
菩提樹
浄土の旅
安海沙門銘
風俗変化
正統帝鉄給の事
象の梵語
澄水帛
菊の庶栄に係こく

日本政府図書
昌平坂学問所
内閣文庫

程子曰解義理
破壁終沈
唱導多沙故海
猫系山鳴動
海破雅布山門呈浮月
檞 楢 楸
覇王樹の花圖
黄菊哀傷の詞
關東番長出觸の命
慈光大師以來法流不泯
蓮民將來子孫

幕下の士布衣を雜へ
負郭粮式目
鮮鮮より坂東の鷹馬
小市國造
不教民戰
出屁
菊紋紫を用ゐる事
媽駒
近鷹寺附頒
呉船借道術
下手の碁石并奇石

いさわらせ
山枕出地の別
元人求仙の詩
釋氏各宗の祖
釋氏蓮花を咲く
安孫の對換記
僭僭の異字
鰹 鱈

鰒河豚の圖
十三夜の月今へ云ふことの字
元將亡於下曲
弘誠和尚
記主禅師系譜
番魚 附 足ある魚
一枚起請沿訓補

○ふたなり　薩戒記ニ形記ノ名ニ三種あり　まて
左義長のかくに仮名書きたるを寄し附しおきたり

○女児陰門生まれなから皮包ありて閉塞したるを麼
して切包とき居所をゆすれは能く出て常人の
ことくよくなり通達す方にて九くして達せられるほとく
包くへし　男児の根皮をもて小便出ぬこと物かくす歴
きにや

○四生の中にて胎生ハ合竅して九竅あり（上ハ両眼両耳鼻二ツ口一ツ大小便道）
九竅の中鼻ハ外ニツ穴ありて内一ツなり　口ハ外一ツにして
内食道ある気を出入するもの二道あり　陰も亦精道
小便道二ツあり　亦眼耳上下より出入するものハ皆胎生也

卵生ハ殻ニ依テ生ス是八竅（大小精並ニ一ツ穴ヨリ供シ　水鳥ニハ旅ニ穴アリ）
卵ヨリ生スル者ハ眼胞下ヨリ上ヘ閉ツ　陸生スル者
物ハ目ニテモ上ヨリ閉閉次水中ヨリノ物ハ上ヨリ下ヘ閉ル
湿生ハ眼ナクテ蒸ヨリ形ナス凡但湿生中ヨリ卵ヲ生シ
生シテ水陸ニ自在ナル物（亀鼈の類）ナリトイヘ凡化生ハ風ニ
成形ハ変化スルモノニテ蝶蚊ノゴトシ
植タル物ニモ四生ノ類アリ土ニ挟シテ活スルハ胎
生ノ類実ヲ蔵シテ生スルハ卵生ノ類荷(カ)菱(ヒシ)ノ水
草ハ湿生ノ類菌ホ及ビ道路衛ニ等生スルモ
化生ノゴトシ也

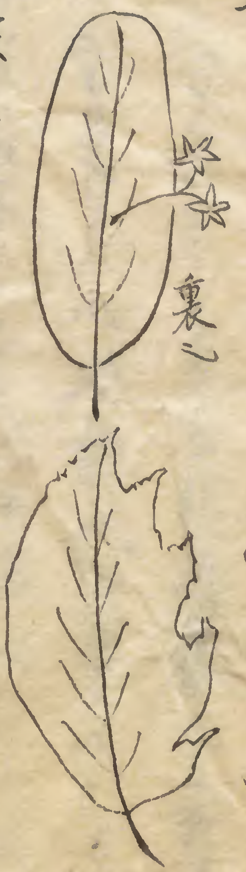
○山ニ栖鳥ハ味短尾脩シ　水ニ居ス鳥ハ味長尾短シ

野禽ハ啄尖短シテ距アル物多シ　林鳥ハ飛(トバ)
ズ短キ意ツカヒ多シ　禽經ホニイフ所ヲ試ルニ
違ヒナシ

○辛卯ノ仲夏小虫アリ　形チ塵ノゴトシ　白ク多ク
人家ニ入リ机ニ付テ所々ニ徘徊ス　其痒キコト甚シ
或論冨ノ曰二三十年前此虫有シ　湿ナル年
アリトイヘリ　一説ヲ考ルニ本草及潜確類書ホニ
所謂浮塵子是也（一或ハ竹蝨　人ヲサセバ痒痛ス）
本草ニ山蚊子人ノ肉ニ入リテソノ海鰕乃能ヲ
以テ治スルコトアリ　浮塵ノ害モ之ヲ治スベキナルヤ
亦椒ノ葉ノ汁付ルモヨロシ

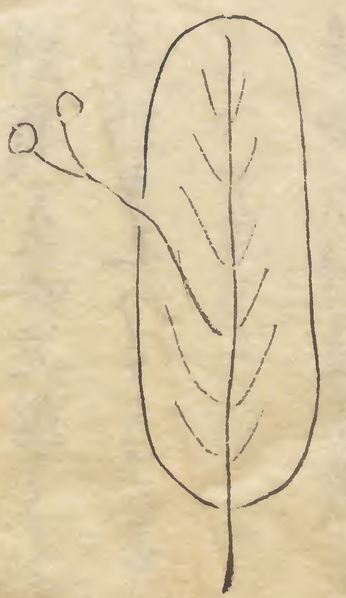
○菩提樹

実の付生する葉ハ如此



実の付さる葉

筑前國香椎宮の傍報恩寺の菩提樹栄西植
し給ふなりとかや
元亨釈書に栄西宋より帰朝の時に種を渡されしと云



亦一種あり俗にの木として椋乃
木に似て叢生し葉ある実
を結ふ又是を菩提樹の如し如く
上図

潜確類書九十九
飜訳名義集等
詳ナり

○方目ハ俗にいふハンといふ鳥なり 是に大小あり
告天子 ヒバリなり 三才図会
繍眼兒 メジロ 常熟縣志 潜確雑書
紅鶴 トキ 本草
秋鶏 クヒナ 本草

○浄土といふハ清浄國土といふ略称なり 面資會法語 天如所述
に諸法不有之謂浄諸法不無之謂土といへるハ
釈氏説なれと鑿すりこの如し 仏者まて世俗なし(?)

○清少納言の陸気(?)に枕草紙に春暖雅(?)と記
号の解あり 按するに恵心僧都四威儀時自受用着
乃事を記せる書を枕草紙と記せり其序に昼置二
座右夜置二枕上一学レ之云々 所に号するより清少納言も

亦因明の友安なり横川の記に効て題しけるやからも
人あり

源信枕草紙長保六年三月の作一巻あり此書
源信の作にあらん親心略要を用ゐて後世台家
の私作なるへし山門の学徒といへとも一乗要決
及ひ往生要集なとの筆と好拙の甚たしきことを知らん
解義も拙し

○往昔慈覚大師の嫡流壇那院覚運僧都正とし
楞厳院源信僧都と両流ともに正流とて当時の
学匠安海法師曰壇那は解深くして学徒に勝れん
て起らん楞厳ハ学広博なれとも智浅し掲て渉

浅しといへりされハ源信ハ弟子寂照をして天
台十七祖四明乃法智尊者（知礼）へ台宗の問目二十七
条を以て答釈を請せしむ安海甚目を人?是ハ
の層気甚き問を求んとて即自上中下三答を作
りて曰ク宋國の答釈此三種を出ましく既にして寂照後
に法智大師の答釈来るあらハ海師中下の義なりし
とかん法智ハ螺渓三世秘淑?の正傳台家中興の名
師にして慈恩大師（遵式）に傳を因しきり源信ハ
業を法智に請て決疑し海師ハ解釈して自知
亦出数の英哲なりし山門今なほ亦あらん
二十七問答ハ佛祖統紀に記したり

○宝永七年庚寅天下巡察使を命しられ上今茲辛
卯の秋凡諸侯郡牧之領ちなれ　各諭一紙出右
諸道巡検使おもて頭に於て國郡の治否
遂く
御聴に達する所に御料私領の官其善政特に
著なる所をもつて大抵風俗衰へ政事煩しく
四民ハつに困苦に至る所も被
思召御憂慮を以て満ちたる所也能於
御代始の日猶も且去
思召御沙汰有之ましくてなほさに御納付の事仰られ
自今已後御料の御役人國郡の諸役主凡て

大小の政事自ら懈る所なく四民各其生を
遂しむへし若使自ら訴りて舊弊猶改まらす事
あらは於ては厳に其法沙汰を被仰出るへき旨被
仰出着也
正徳元年八月

右八月十五日被　仰出之

○
風俗 上所化曰風 下所習曰俗　教化 以道業誨人謂之教 躬行於上風動於下謂之化
いにしへ小学校をまうけて行義芸を修め大学校
をたてゝ道徳を明らかにしの方に風俗上に正し
くして習俗下に美かりし後世小学校の教廃れ
て人才割裂し大学の教なく義理明らかならす

らんこれをもつて朱子大学の一義を修て天下を
正しへ真西山衍義を述して時君を諭ス皆是
道学を以し風俗を改むる道にして学ふもの其文
にのりて其義を探ひ其理を窮めてこれをみに責
ぬるとしらん徒に誦説口耳の資とするは是
法の時は聖言を侮りて此を以て亦痛むべし人々

○心學を説なしかれこれあり何人の遺をしきをしらん
其中に実もし思ふに其二三条抄し侍り 文をきき求ひ辞て去ん
古への道今に應し行はるる実は道を知るに今をいふ
まへは周の時乃数を以て亡日を知るしく其九を其
綿田に出ることのかきは実に益なりとして数百年を
歴て生氣なきは種子何の生る理あらん此去年
納め並したるものをとし年の春まけは必生し実のなし
此是は此去年の種子侍ちて此に言をかしこくなは千
万年の後もしれ種子をして侍ぐべし種にして三代の時
の種も今實なるに此と是は其書を学ぶも亦於とす
三代の季孔子脩めてまた幾しく遺経を以て漢唐の注疏
傳へ五季を経て宋の時再び明らか成りしを今に傳
はりて我国に傳はりし四書五経注を以て能くその
本に以侍るは古しへの道との差とて二三なきにしる
経書は道をのする器なり其を心に修て其道を脩
むるは人々の明德なり此德は天地よりうけ人氣化

生

乃時によりて小計りて天下古今不易の物にして
いつも同し古今一貫を明らかにすれは修身の法を若く
学ひて史を学人ても甚徳を明らかにすれは天地の
初て生しより人の明徳も今日の人の明徳も変る事
無かりし何て古の道とは近世には宜き
人の心にかなはしき事なりとしてへは古すくなく人あしく人に
三十一字の和歌を愛し出たる時人尽くして中字の
よきをは始に誤りて嫌ひたりし一兵一字も分かちなけれは
必をし法式有て人てしらひ苦あれは甚をはとし然
しても道乃おしきもあれは是を好みていふてき也
悟りても亦已まての方法まれ人を悪きてはならぬもあれは

論あるき誉主を得るは是皆治小人の私なりけり
大河ある国は水の徳ありて民力を労せしむるに
地境によりて天乃なせる所は人力の及はさる事あり
但此川によりて人の為ある禍あることをかりてしてへき事
なりけり天利を好むもあれはさてしてへは百姓の新田を得
へきしてには地理能く弁へ家築きまする所を妄に堤を
仕出しあるひは水を逆さま流れんとするより災害を為し
却て禍まをしき本田を損し却て古田百町の損と
なり民の役いやましにして人の難儀となれりしたを
よくすれは彼の害なくしまた地形に背き水路に度る堤塘
を築その為に洪水ある時は必破れて人の労をもしも全護

出さしむべき貴きものとなし亦民の稼となりて
田を開くもの多くは新田をなして力を入ずして田畑とて
訴へ出るものも有し也是は一時の利をむさぼりて末の代
の禍をのこすものは國の罪人なれども其上なる人甚
虚上を欺て主人の悦を取べき為何の考もなく
奸人にてあるべけれは要害の地をも害ふことなく
無用の地をもむさぼりて人の禍をなす事ありて此世話
國あり上下只利にまよふ故に小人に用られて
政ごとの根本を破るに似たり器物など作り出し
巧なる物を以て人の衒ひ他の目を驚しめて己が
耳を悦ばしむるもあり或は人にてこれをなしてやむ

家をも富さかへせんとするより上下無用の器物を作
り出して世の費へ限りなくなりゆくなり君の器は
質素にして其くはしの巧なるにて自其用あり
て貴ぶべし
此外にもまだ多くあれども事多ければ略し侍る

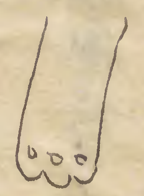
○近来帝先達の圖像を描しめ給ひて称しき
絵やありしが書かれしものはかくあやのいろやせてきたる
ことなりしもの其色やうすくて見えがたし
掛けて見るに清らかなれはこそ物をしるしやすかりし
とて其後絵の新しきものをなして其色を失ひしと

ふるき文に侍るにや　浜辺には古盃及ひ貴介なるあり
介の類はけんかの衰具なとには菜忌乃錢せの類
と唯きいふもあらひ介の垢つきていとむつかしけれと
あらひきよむれは元きよき切をなして世にこそ玩ふなれ
侍る浜辺にて言盃をなし侍るのみをは年へたるにや

○奥州に象潟といふ名所あり　我國にも象ありしか
亦此地象のかたちに似たる所ありといふ人あり　本草に云象
潟は出羽の國にて攝せり飽海郡に有と
よの中はかくてもへけりきさかたの
あまのとまやを我宿にして
きさかたは谷本をいふや貝の事ともいへり　俗にいふはいさこ貝といふ　枝子とする貝なり

浜辺とも羽州の人はきさけは魁蛤（アカヽヒ）或は蚶とも本草　なとこそ國
にはきさ貝とは中流にまかりさなるいふや貝つとも言貝
なりてしこほしてたまんとは國扶桑物にしてあか貝とも甚
一種なり浜辺には象の字にかり用ひてかく字して
言葉には蚶潟（キサカタ）なるへし

○象乃梵語は伽耶（北戸縁）　其雄なる牙の長サ六七尺雌は
牙纔に二尺餘りなる也　凡其交る所は水中にてまするにて
を以て相結するにや　本草集解　浜辺は大雪飲香天の秘
像なきまて思ひ得にてなかも象の足指なく爪中
ありしにや　虎なとの足のことく盈くは非なり　圖乃
ごとし



○獅子の胡須は僧伽彼といふ陀ぎにゐて大きに尾ながき
ものとぞいへりと云 茲國獅子の形は似たる形なるべし
○澄水帛は尺ばかり涼しく暑き気を消し 鮫綃衣を
いとかろくこれをまとへども是は一種ならし 杜
陽編に記せりかゝる筆記の物ことごとく信じがたけれども世に
ありはありと欲しかりしも信じ[illegible]庶獨身疑ふ
ありとやいふ 事をすてし傳を蔑にして究がたき物あります
物を治備の理の光彩を極むる志ある人もこれを
多福皆天にして人力の如何ともすべからず不能なるなり
○杜詩に 明年此會知誰健 醉把茱萸仔細看 此重
陽佳菊のことに花大なるものを観賞しあはれなる
こは唯黄花の蕊を採て延壽の客とし 紅葉の
嚢を佩て辟邪の翁と成ども 豊凶気のみなは
事ぞなりたまふてきものともしらで 植のこゝろし 菓
乃いつしか捉ひて見し 秋のかぎりは思ひもかなしく黒
き蜀鬼の聲をきくなるべし
赤実黄花荒径色 為誰延壽辟邪名
東籬夢旧残風去 獨送飯雲阿雁声
辛卯九日
○菊の花葉を添へて露を見よ 隠逸の高操となし
蓮の汚泥に漬ながら出て水を出るを君子の潔行

ことに殊り牡丹を富貴のものとはいふは鄙しむこと
似たりといへとも蔡虚齋の牡丹を曰富貴所謂仕者
為通也といへるをよくよく見れハ窮 菊 通 牡丹 と係ふ
して道あれハ仕へ道なけれハ懐にするハ君子蓮乃
時にかなひけるを三花によそへていへるにや

自疑自失自驚心　却咲斯人巧用心
獨有愛蓮堂上月　分明照破此人心

朱先生の詩に閑花十丈是尋常明月露冷無人
見と作られし これをもて見れハ周子命辞の佳なるは
へきとも

○程子曰解義理若一向靠書冊何由得居之安資
之深遺書　朱子の口召に川原紅緑一時新暮雨
朝晴更可又書冊埋頭何日了不如抛却去尋春
といへる了扱のこゝろより後の学者の葛藤に繞されし
侍るにやよりて空虚高妙にして不立文字の
道を好む人も亦備といふへし

○幕府の士布衣を聴ハ敢て六位の列にハかなふ位
袍もたしかならし正保辛卯の秋始て鮮の聘使入朝に
依て布衣の者にして番長近衛及帯刀ホと命しあひ
六位の衣冠を服せられし御せし前相國公近衛
東照宮にましますに定てかゝる式なし議ありともをへし
なかりや昭代礼儀のすかたに立かへりことに昔を

山本なとゝいひし給てし
○破辟焼流ゆのこゝろ虫の声もかなしくて恨て　空庭月
白菊の雑なる古今なりけるか六五年の秋に見し月よりも
猶哀なりけりと
抄秋又遭十三夜　雲連風未半辟光
一剣残声古松影　素琴和渡入愁腸
松涼職として夢成らく只六之層の趣をも同のこと
○貞観格式目 一冊　杜撰の書也
世に妄偽の書多し王世作り出でし古筆に名成
のこゝろあとの國家の害を成す事多し愚沉の
を秘蔵し日蓮宗の僧一ハをいて神道を説く

老中しあり物之く悔まむへし
○京乃唱導沙故海家府 薩西寺 に来りて説法ハ
き雑説ならさるにしてかむしきまなきといひて人をして
胡麿ましむ彼曰此家の男女誦経をなさんとするときは
日也只念もうらし念仏なといひてよく日蓮を好む
人読て傳る事曰く経式禅經の式いかむ作りしされは
末の經をよむ時は正しく經典にて序し菩薩及び
全く列る諸天未然の衆に住して文と句と分けて
之四衆これ新本の法調なとすべしとて
疾りしは読を書しまして読誦し書経こゝをなく
信解する者誦經の本意に於て今世の経を読をするもの

訛謬ならむ年四五十年にいたらく清酒ならしめ歿
これを所謂無稽讀經水田蠶養をなしけり凡そ
仏書をもかきし只聖賢の經傳を讀む人あるを
教へく自反の言をなさず然るに牧童の意訳を穿
犬猫の本質を嘲るか如し

○九月十有五日新羅王我 要東をまもりして鶴鷹駅
馬府下より来る（浮馬は性を侯 浮唐馬帰化牝馬） 浮馬は五疋駮（フチ） 一疋驃（アシ） 二疋
騮（クリゲ） 一疋 騧（カゲ） 一疋 実に蹴足なりしと見えし兼ねかくる人侍りし
韓人三人中官は緑色（乗物） 次官は縹衣（馬）下官は白
衣をきて背子（キイス）を着侍りしてかく手まきて凡そしかりき
きらきらしく見え侍る浮唐二十四連（箪（エサツ）十二臺） 戊防

ありしに来ぬやらし　十六日昭ヶ七ツ過て 諸を露し侍る

○八月廿八日の夜熱田の濱で祈り置し浮屋（戸部天皇の浮屋と）
（是六月寄ぬ）燈明の火仮屋をつり出て一所に焼し寺
こしき浮屋寄て出雲を侍る事もありしとも焼し例
なき侍りし亦此月廿六日岐阜の稲葉山大きに鳴動して
所民恐れき驚歎鳴渡し打かかる稲葉山の神社御廟
の屋根より火出て焼しとぞ希有の事也

○天孫本紀云宇麻志麻治命七世建膽心（タケイココロ）大祢（オホネ）命
二男大小市（オホヲイチ）連（ムラジ）公小市直（タイチノアタヒ）等祖云々
國造本記云小市國造大新川命孫子致命云々
按ニ大新川命ハ建膽心命ノ弟也二紀世系異也

旧事記未定の本なりとも其内を以てしるすべし

○延元元年の冬後醍醐帝山門より還幸の後潜出
京乃事保暦間記に拠するに小島形信伊賀
國より義兵を挙て京へ参て発向せられ帝
神器を奉して潜出京なりとし
皇年代略記に云延元元年十月廿
一日より潜幸し歴代皇記には廿二日に幸し公卿補任
には廿四日の事とし太平記には八月廿八日に吉野へ
潜幸し八月帝山門より出て山門に坐し十月十日
叡山を出潜幸有し 南朝太平記には十月或十二月に潜出京とも記せり 帝吉野
山へ潜幸納の潜幸は十二月廿九日也 吉野は今金剛峯寺にあり

初顕信楠正行と共に内通して和州に潜幸せし
処たとへ還幸ましますとも先高野へ幸ましめ
んとして僧共容易ならず高野の僧遠有乃事
次の年正月四日高氏高野山に寄る旅とも多く
兵なかりし 今の本 於此三条刑部右衛門京へ潜ませ
計らひて吉野へ臨幸あるべし
次の年丁丑正月五日理新右衛門尉林高満自を奉して
越前國金ヶ崎に至る 太平記には十月とも有り南帝の 府生判官保
宗行竜泰藤原野氏形右衛政真木杣山に
於て従五位下右衛義治を大将とし旗を挙て王の
軍を勤し 太平記には十一月に正月廿日の潜りとあるし

凡そ記録に年月日時の前後并齟齬するもの
是のみならずして其実を得ものなし但古記
兼録を参考し其誤を正して可也

○孔子曰以不教民戦是謂棄之賢君は将を撰ひ
良将は能を揣(ハカリ)て以て兵を用ゆ三軍戦を学んて合し
以て暴を禁し以て乱を制治へし丈君として将を
えらひ是を将として士卒の能をしらしめ民妄に辞令のこ
を以て左右せんとせは何の用ゆる所あらん況習練せさる
卒をや兼礼容礼ホ死生にあつかりしものは其銘
経く事に及ひしいさる有司なもの令するまてもなくして自
ら法を知り道を知る故に事に臨んて必惧るへし

失礼なくして是をのこ治るわすかに民一小事と
いへとも其器量なくんは其事成しかたし況大なるや
軍旅の大事をや蓋し君将軍略をしらすしていかて
か兵を用ゆへき士卒もまた軍術を志て以して豈戦
を大治へんや然れは聖言一の教に眼を付
給ふ上として教ゆれは下これを習練し軍陣のことに
通りし民凡そ国を治るの教として何そ民道に非
層きや

○櫟は俗にクヌキといふて和爾雅には櫟の木なり
これは大小あり亦因種ありて大なりしいうりのかし
ま餅に色も荅なり栗(クリ)をいうは栗の荅に似て

一瞭ヵ大きさ也とんくりハ小檞(コナラ)の実也
櫧櫟もよく状ひ同しきゆ樹なり　椒(サンノキ)なと一停ゆ称
ぬこれハ筍を作る木なとも

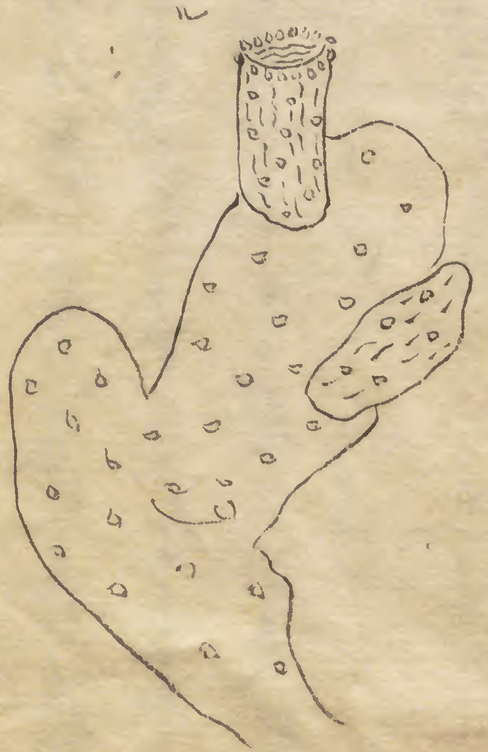
○楸を俗にハあかめかしはといふて秋ハ色よき也
大なり救荒本草に葉を作りかたしとあり

○松出羽出雲ニ俗箸なとハ出居ミいふまりや続ヵ載
ミ従三位氏久出居たつくりて資季の道をもとき
君のこゝろやちりもとあり除てふる
家神山乃やまのむかしのこゝろ

○覇王樹(トウナツ トコナツ サチラサツホウ イロヘラ)　花失ミ花実の事なし　花ハ先生ノ処なし
本箇し辛卯九月平なり友曲潤泉の庭にあるハ乃

画して実た五六顆落ち侍る長さ弐寸凡園ゆるき成
き四寸あまり重サ十二三錢(モンメ)色栢榴実の皮のやうにして
色やゝたるりたるのり無花果(イチジク)に似たり疣子に刺(ハリ)ぬく
して堀けし低いたしくハ刺落て層疣子のこゝとし
勝るしけれ共一顆をもらひて植侍る人ニ思ヵ侍ゆ其
ミ形をを図して人ぬ人ニ知らしを侍ゆ

此形窪クシテ
シハアリ其侭
置ケハ自カラ
落テクサリ侍ル



○菊を重陽の花とし紅葉ハ秀林の錦とも詠し侍れとも重陽九日ハ菊はいまたさかりならす紅葉も赤神無月なとならてハ色付し気候古と同しからすや

とも茲八月廿五日九月の節として重陽の節に中気に近く侍れハ菊咲侍らん廿日頃にや盛ん

なるへし

○はてハ大方紅葉もまた北方の寒植し菊の生立て花も大きやかに淡黄の色しらきくなと多くまして一株の名付たるといひ侍ると淡紫の貴人
一唐よりハ一種渡りしとこそ載置しを本として自ら笑して

名ありし赤草ありて白き花をかつらをハめ何かよ
つきぬとて見たてなるをさ草を藍すれるハ小紫衣を
てらさせいひし一株の花何心もなくとまも臥して
いふしき村ならん見るとこそ床しかりしも思ひ出るは露を袖
も今一しれぬを恋ふれくあまたる如きとものなる源
満入牧信思ひ染ゆ花をさそふ乃はての山にまある
たちて思ひ出られて

忘れぬ秋をとこのはの紅山

清みし露の下にも紅も

その小紫衣と云るれゆくともまつに片岡山
の名をもたせり一叢の末にや名高の庭もとハせる

新羅浪よりよせし日の旅衆の濱いそ忘よ
貝ひろひし世の松原ハ名残として今ハかくハ大まき
伊勢の海と袖ぬらしけるもあつめ延りん藤波なき
かくらこにおもハぬやしもあまり水無瀬川
小袖衣もしかまての名付ましし菊とち梅まてて見侍
なるましけりしもなるし給し

色まさり一入夢よりうきはよる衣
大まときこゆての水を猶う川まて

○馬の一歳なるを駟（タン音還）といひ二歳なるを駒（コウ）といひて
りうの哉偕三歳四歳なるも駒といふハ非なりといふ人あり
平田氏の兄に在人作との馬なるまして駒といふ字書

まあれハ二歳のことく涓けれハや

○一度鉄餅の聘使ともなりけり翠帘番長左衛
の官人を命して其負八人なりし人定まる故や
と申日摂関の隨身と番長二人左衛門人九て八負也
かりたりる隨身も待りけりや 番長ハ騎馬左衛ハ歩行の事おなし年と兄なり
随身宣下と左右近衛番長各一人左衛各三人とを
これをもつて知るへし

我公家の随身六負なり納言参議の随身ハ其と
六人の事弘安礼節に見えたり

○比叡山延暦寺近江國志賀郡内所々於今五千石
目録列帯之 事永代令寄附畢全可收寺務之状如件

慶長十五年七月十七日　家康法判

山門三院執行代

山門三院とハ東塔止観院西塔宝幢院横川楞厳院也延暦寺ハ一山三塔の惣号也　山門凡一百二十五坊其知五千石内東塔正覚院一百石西塔止観院五十石横川恵心院五十石也願人ニ使每院二十石宛ニ充行なり

○延暦寺ハ一祖伝教大師（根本浄土院）二祖義真和尚三世慈覚大師（前唐院）慈恵ハ末法流総派ニ分る所謂法曼院流利生院流三昧院流也

亦坂本西教寺ハ一流として浄土門を学ひ并戒二ヶ院西山善峯寺三鈷寺及ひ洛の遣迎院廬山寺ハ天台真言律浄土の四宗を兼学し栗生光明寺ハ西山の四宗兼学なりしが今ハ唯浄土門なり

○異邦僧道衍ハ諸上善人の祖にて慈恩将尉去非三藏乃弟子なり甚性豪偽にして酒食婦女の言をもつて慈恩を脩し始めしむ時の人ハ之を法華法海と云ふま一宗としてみなありしと云て我國牧ニハ所似す

○拾芥抄に疫流行の時乃厭勝ハ蘇民将来子孫なりの七字を載人とし祇園社神以簡を書り賣伝ハ備後風土記の説（本ニ）より出て我國文書中にみへさる也

今世孫娘子なりといへども此等の風 小濱に即在来る事とし
奉りても似たりし東都の俗風さへら三八省下川松本に
在り年ことにいつも下労の事也といへ者の年ありて用ひのよう
こそ乃ち是俗節人日 上巳 端午 七夕 重陽の膳にる 疾を避る事り
中ひとつにても大豚食物の時食にして 舗系の膳せまうか
元より屠蘇乃ひ白散を飲ことて 和漢久しく傳来せり
是よりきこともの事なりとて煩ひあり人をたすけ侍るに乃瘡
癰疾を治し也あしぬ痛癖ありても甚よりたまひ百を
以て数ふへし 更に居あしゆくりの為にして千に一つも
ちぢ給ひし 陰色霊部道士の人を欺くる條こうして
君子聖人の蔵へし事にあらし 仙者神に咒術多

又れども甚感應ありのよりすくでてにいへ医術にみ
治す也し是れ何そのしかも 心を大にやよく治さし其痛
を安んし天に任せて生涯をつくし給きことあらま
ほしけれ世人病を悪て死を恐ることやすらます徒に
惑をおこさせ侍る今大坂冨家の病には貧章山
乃ことく狼巫医市のことく集る祈禱なとしく医術
論ありしても死にけれと大麻並数来臨して信もなく
医法の半かこけて逃出てさ治其僧法師乃出来
おりたり侍りもよのつね乃有様にこそ

○ 長州赤間関の北一里ありしつ筋の濱よりいとふあまた
すこして於の碁子あり因國の海をもて便にゑんとて

奇物侍り淡路の玉石(タイシ)は浜より出て色く那智乃
黒石もまた奏子として山城の賀茂の深よりの溶石
伊勢の磨石も人数ありの石薬あり能前の名物に
帆柱石越前敦賀の湊に杉木石なといふもあり又や
紀尾南知多郡の石炭を薪として侍り 黒くして白き紋ある石なり 近江
國花岡村の石ハすくもとて薪とするを是ハ石にあらず
土なるあし只木葉の腐たるかたまりたるなりとしまる
まくもとて黒石あるよし大和南部にあり是なおを
とふて是ハ石炭にして知多郡にある石なるべし

○海䲔(クジラ) 和名イサナドリ

首ハモリにて突き死して後ら引よせて尾が死して

浦々寄りたる猟漁(イスナトリ)といふてり いさなとりハ 骨皮を
亦近江の湖にいさきよりも和名に語るハ豚茄揚之
海䲔を関しかる次

○河豚 紀國大阪に二種ありカナイといふハ大にして遍身刺あり味厚くして
毒あるし 魚のぐいハ小にして刺なく味淡く
毒少し 亦一種さばふぐといふあり 形
尾長して唇頭も鯖魚のごとく 歯
尖にして上下を各一枚づゝあり 鱗なく
して刺あり 色ハ青黒く背に黄を帯び
味好かる淡して酸し 是ハ毒少しといふなり

鯖河豚之図

下而不足

○北極出地之別

日本北極出地三十五度太　南極入地三十五度太

清北極出地ハ

北京四十度太　南京三十五度余

按するに日本と南京と大隙なしと云

朝鮮北極出地四十度　小京に似し

琉球北極出地廿七度　極南方の地小京にあたり

○京にある人より九月十三夜の月入てさらに以ん数をそろへ

ほとゝきすの声の乃ち行しかよりし月のあそひさを

来まさし侍る奥に

旅にまてもむくしの門は只し人

月こそ秋の涙としめるふ

○元至順辛未福建廉訪使盗闌沙求仙詩云

力筆相従四十年　非非是是万千千

一家富貴千家怨　半世功名百世愆

牙笏紫袍今已矣　芒鞋竹杖偽悠然

有人問我蓬莱事　雲在青山水在天

○元将亡都下有罵玉郎曲極其淫泆之状蓋是桑間濮上之風居変風之極嗚呼元人之情以此可知

○或問熱氏各宗の祖多く他を非として自家を張大

されは和合の名を背くハ何なるや 曰 瑜珈論十五曰或
為レ成ニ立自宗一或破ニ壊他宗一或為レ制ニ伏於他一或為レ権ニ
屈於他一建ニ立宗義一亦曰開レ自伏レ他とい此名を似く
心得て自讃他毀のこゝろを頂むとき 日蓮の如き
是より瑜伽の意ハ徒ふことまたにあらされ文を以て
意を害するものなれハ

○弘教和尚ハ金剛智三藏の術也 辨正三藏ハ不空の弟
傳教大師ハ我國石山内供淳祐の果術也

○釋氏蓮花を以て種とすること或僧世親の攝論
名を依く一國作りて 子 を示せり是阿弥陀と蓮
花とを表裏するものを能きり如き

○○○
蓮華

- 妙香
- 可受
- 菓頼
- 清淨

譬法界真如

常 樂 我 淨 四諦

- 大圓鏡智
- 平等性智
- 妙観察智
- 成所作智

四智

- 不壊
- 歓喜
- 自在
- 不染

四位

- 無量壽如来
- 甘露王如来
- 観自在王如来
- 清淨光如来

清淨金剛

弥陀種子自性清淨吉哩(キリツ)字

其三昧耶形八葉開敷赤蓮華

其全体阿弥陀如来

其大用妙法蓮華經

国立公文書館 National Archives of Japan

○相州鎌倉佐介ヶ谷光明寺開基良忠記主禅師父ハ
御堂関白より出たる年月名證として以て摂する道
長ハ後一條院万寿四年に薨じ良忠ハ後宇多院
弘安十年に寂せり其間二百数十年を経たり如何曰
禅師の傳にハ右道長八世の孫なりとあり以て示
系図を案ずるに

品 道長 御堂関白 — 頼通 宇治関白 — 師実 京極摂政
- 経実 贈太政大臣 — 経定 権中納言 — 頼定 参議正三位
  - 頼房 左中将従三位
  - 記主禅師 鎌倉光明寺開山 母伴氏

禅師正治元年七月廿七日石州三隅庄に生る十
二歳の時当国鰐淵寺に入て月珠房信暹上人の
弟子となりて天台を学び中頃ハ並観上人及源能
闍梨に依て真言を学ばれ常西禅師乃俊芿業
範和尚に謁して禅を参じ俊芿禅師に受戒
して律を学び晩に筑紫善導寺の開祖聖光上
人の室に入て浄土宗を伝ふ是和尚ハ此の宗の三祖也
弘安十年七月六日鎌倉にして寂す年八十九後伏見
院永仁元年十月勅諡して記主禅師と号せり
委しくハ彼傳を見るべし

○
安然の對校記光起の東曼荼羅事ハ金胎両界

乃毒無し

○凡て毒ある魚ハ河豚のことし俗にいふ所の海牛を
はしめ毒魚多し本草の海薑ハ其毒鵃より出ると
いへり是を俗西國にてムカテクシラといふ此魚ハ大
きにして背に五鬣ありて口に十二足あり是を食
すれハ忽ち死すといへり

足ある魚彈塗（メツラハセ）のたくひハ密波志と一名を闌胡とも
いふ其他鯓魚（サンセウウヲ）四足あり葦（アシ）鰕（カリ）魚一名琵琶魚とも亦いへし
乃ハ又鰭乃鰭即ち手足なり類推あるへし

○僣（テツ）音鐵狡猾也　僣（セン）音尖去声　此二字同しからす俗
通し用ゆ非なり亦儹（サン）音賛聚也と誤り用ゆるあり

○參南堂芳上人一枚起請沿訓補を著して如何
なりしにや終に流布もせす返書に
　こゝろさへ動きはたゝし海士小舟
　　ま帆にまかする風のまにまに

○万葉集に堅魚とあるを後の俗鰹に作る是を東
医宝鑑に載たる松魚の字と大和本草にいへり然るや
否や亦東医宝鑑の大口魚を我國の鱈なりといへり
鱈の字唐土の書に見えすといへとも我國久しく用ひ來
れり凡て魚の名の假借の字本朝なる類多しといへとも
此字なりとも通用してくるしからぬ文字を出すハ人の惑ひ
となるへし誤りとして俗に従ふをよしとす

大日本帝國圖書印
日本政府圖書
内閣文庫
国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan